
持続可能な「こどもまんなか」の街づくりの一考察 ～「人+人（ひとひと）プロジェクト」実践報告～

大野 雄子

A step toward sustainable “Children’s Middle” town development activities
～Practical report of the 「Hito + Hito project」～

Yuko OHNO

キーワード：レッジョ・エミリア・アプローチ、幼児教育、地域連携、領域「人間関係」、
持続可能な街づくり

子どもたちの喜びは何だろう、子育てしやすい地域とはどんなものだろう。そのような問いの中、人と人の繋がりを大切に「こどもまんなか社会」に貢献するという目的を持った保育学生が、地域の保育施設に赴き、参加型の劇やダンス、ベープサート、パネルシアターを演じ、交流を持つ「人+人プロジェクト」を行った。子どもの反応やそこから得た自身の体験から「こどもの育ちを支える」地域の一員としての自覚や、保育への多角的視点を獲得していく実践を記録した。

1 はじめに

令和5年12月、こども基本法（令和4年6月法律第77号）に基づき、「こども大綱」、「はじめの100か月の育ちビジョン」が子ども家庭庁を中心とした政府において閣議決定された。こども大綱が目指す「こどもまんなか社会」の実現に向け、とりわけ「はじめの100か月の育ちビジョン」の「5. こどもの育ちを支える環境や社会の厚みを増す」のビジョンでは、地域に共にある短期大学として、大学生として使命と責任を感じるものである。

昨年度の敬愛短期大学『年報』（2023）の中で、町全体で取り組まれている語りの祭典レッジョナラ2023を中心にその様子について研究ノートとしてまとめた。レッジョナラは、町全体の公共施設等を利用し、レッジョ語りといわれる語り、演劇、読み聞かせ、ワークショップ等の手法で子どもを中心とする祭典である。見学をして得たことは、それは単に子どものためというのではなく、それらの成り立ちと現在まで続いている「プレゼントの循環」の考え方から地域の演者たちの喜びにもつながっていることである。石井（2018）によると、レッジョナラの成り立ちは、1970年代、ローリス・マラグッツィの発案で市立の教育機関「ジャンニ・ロダリ」が設立にはじまり、言葉や表現、お話づくりの共同研究やシアターワークショップなどの活動も盛んに行われたことをきっかけとしている。その後に教育関係者や保護者への養成講座等が行われるようになり、現在でも保護者のためのアートの語りを学ぶ養成講座は、市民に無償で提供され、

市民はそのプレゼントを受け取り、半年学んだ語りの魅力をこのイベントでお返しするという文化が時を経て成熟し、演者側の持続可能なプレゼントの循環に繋がっている。

森（2013）によると、乳幼児教育は、子どもの生活する時を大切にした実践であり、子ども時代に自分はかけがえのない存在として自己の価値・尊厳を認められた体験は、乳幼児教育を大切に継承していくバトンとして次世代に受け継がれESD（持続可能な開発のための教育）の具現化へと繋がっていることを述べている。本学学生は、保育者を目指す者が大多数であるが、保育者という視点以前に地域に共に過ごす大学生として、地域の子どもたちのために何ができるのかを考え、人と人の繋がりを持つことを体験するために「人＋人プロジェクト」を行った。

2 人＋人プロジェクトについて

保育の三法令は、人間関係の内容に「高齢者をはじめ地域の人々などの自分の生活に関係の深いいろいろな人に親しみをもつ」ということをふれている。本プロジェクトは、地域で共に過ごす大学生として、人と人の繋がりを大切に「こどもまんなか社会」に貢献する目的を、近隣の幼稚園、保育園13園のご協力を得て実施した。実施に際し、10名前後のグループで、3歳児から5歳児の子どもたちが楽しめるものを20分程度で発表できるように検討した。検討の結果、劇、パネルシアター、ダンスなどの意見が挙げられた。

学生がチームで取り組んだ内容は、表1の通りである。学生たちは、「人間関係」の学びに着目し、子どもたちとの関わりに工夫を凝らした。特に印象に残ったのは、参加型で子どもと作り上げる劇である。学生が一方的に演じるのではなく、「うんとこしょどっこいしょ、みんなも

手伝っておくれ」の掛け声を子どもと協力して「大きなかぶ」を引き抜くものや、「オオカミと七匹のこやぎ」では、「ボクがここに隠れているのは、絶対に言わないでよ」と、子どもの発達を考慮に入れ、反応を取り入れる場面や、オオカミの他に郵便屋さんが訪れ「あっ、ママだ」と全ての来訪者にドアを開けようとするこやぎに、「ちがうよ、ダメダメ」、「その人は郵便屋さん、だけど開けない方がいい」などと、子どもの反応も含め、話を進行させることを大切にしているものであった。また、「三匹のこぶた」では、全ての家が吹き飛ばされた後、「どんな家だったら吹き飛ばされずにオオカミから逃げられるのだろう」と悩みながら子どもたちに問いかける学生が演じる子ぶたに「コンクリートでできた家

表1 交流の内容

内容	タイトル
劇とダンス	「にんじゃの50音」
体操	「昆虫太極拳」
劇と歌	「オオカミと七匹のこやぎ」
ベープサート	「はらぺこあおむし」
劇	「オオカミと七匹のこやぎ」
劇と体操	「アンパンマンの縁日」
劇	「桃太郎」
参加型の劇	「おおきなかぶ」
劇	「三匹のこぶた」
ベープサート・手話の歌	「いろいろな国の子どもの挨拶」 「世界中の子どもたち」
パネルシアター	「大きなだいこん」
参加型の劇	「三匹のこぶた」
劇と体操	「アンパンマン」
ベープサート・手品 ダンス	「ミックスジュースマジック」 「フルーツポンチダンス」

がいい」「オオカミが覗かないように窓のない家がいい」などと子どもたちの意見を集め、絵の上手なぶたが即興で子どもたちの注文した家を模造紙に描き、オオカミから身を守るという、この場にしかないストーリーを子どもたちと紡ぎ出していくなどの工夫がみられた。

3 アンケートについて

(1) 調査対象者

保育内容の指導法「人間関係」を受講する2年生学生116名、その内アンケートに協力した学生114名であった。

(2) 調査内容

「人＋人プロジェクト」後の学生の意見を把握できるよう、アンケートへの回答を依頼した。内容は、努力レベル（活動に対する自分の頑張り度、活動に対するグループの頑張り度）、学習効果等（準備時間の長さ、準備や練習を通したグループの協力、発表を通した子どもの印象、発表園の対応や印象）、子どもにとっての地域の支援者という側面（子どもと人間関係を持てるよう工夫をした、子どもの年齢や興味を考え発表を工夫した、子どもにわかりやすい言葉で説明できた）、保育を学ぶ学生としての側面（地域には保育に生かせる資源がある、子どもには地域とのつながりがあるとよい、保育の場に地域の人材を活用すべきだ、グループ活動からよい影響を得られた、このような機会がもっとあるとよい、グループメンバーの関与度、グループ編成の工夫）、本活動を通し特に学びとなったこと、考えたことについて（自由記述）、本活動での改善すべきところについて（自由記述）とした。

4 アンケートの結果

プロジェクト終了後に実施したアンケートにより、本活動や学生の学びの状況を捉えた。

努力レベル（表2）においては、活動に対する自分の頑張りも、グループの頑張りもおおむね満足している学生が80%を上回っており、学生の活動に対する意欲は引き出せたものと思われる。

学習効果（表3）については、準備時間や準備や練習を通したグループの協力については、満足から非常に満足が60%～70%代であり、「ふつう」という回答が他に比べ目立った。

発表を通した子どもの印象は、非常に満足が54%、満足が31%だった。発表園の対応や印象は非常に満足が58.4%、満足が23.7%と高かった。

子どもにとっての地域の支援者であるという側面（表4）では、「子どもと人間関係を持てるよう工夫をした」強くそう思う38.6%、そう思う57.9%であり、「子どもの年齢や興味を考え発表を工夫した」強くそう思う37.7%、そう思う55.3%、「子どもにわかりやすい言葉で説明できた」強くそう思う46.5%、そう思う49.1%であった。

保育を学ぶ学生としての側面（表5）では、「地域には保育に生かせる資源がある」強くそう思う34.2%、そう思う57%であり、「子どもには地域とのつながりがあるとよい」では、強くそう思う51.8%、そう思う46.5%であり、「保育の場に地域の人材を活用すべきだ」強くそう思う43.4%、そう思う48.7%であり、「グループ活動からよい影響が得られた」強くそう思う46.5%、そう思う43%であり、「このような機会がもっとあるとよい」強くそう思う40.4%、そう思う40.4%であった。

「グループメンバーの関与度」は、強くそう思う33.3%、そう思う48.2%であり、「グループ編成の工夫」強くそう思う34.2%、そう思う38.6%であった。

本活動を通し特に学びとなったこと、考えたことについては、抜粋し掲載する（表6）。「グループで協力することの学び」、「子どもの目線でどのようなことを楽しんでもらえるのか考える学

び」、「子どもの反応から得られる学び」、「子どもにとっての地域の学び」と多数の項目が挙げられた。

本活動での改善すべきところについての自由記述では、同一の内容をまとめ、分類した（表7）。「準備時間の不足について」、「グループの編成について」、「発表の工夫と練習不足について」、「事前の計画の明確化について」に関する内容が挙げられた。

表2 本プロジェクトに対する学生の努力

N = 114

努力レベル	非常に満足	満足	ふつう	やや不満	不満
活動に対する自分の頑張り度	35.1%	46.5%	15.8%	2.6%	0
活動に対するグループの頑張り度	40.4%	42.1%	15.8%	1.8%	0

努力レベル

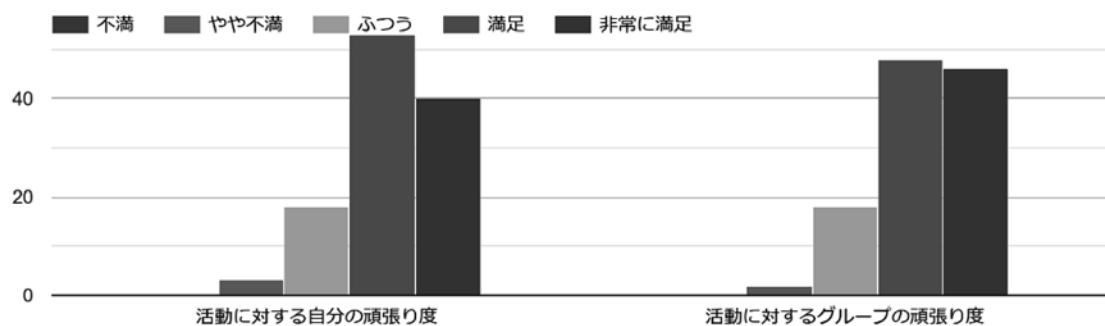


表3 授業を通じた学習の構造と効果

N = 114

学習効果	非常に満足	満足	ふつう	やや不満	不満
準備時間の長さ	22.8%	43.0%	31.6%	1.8%	0.8%
準備や練習を通したグループの協力	35.1%	38.6%	20.2%	5.3%	0.9%
発表を通した子どもの印象	54.0%	31.0%	14.2%	0.9%	0
発表園の対応や印象	58.4%	25.7%	13.3%	2.7%	0

学習効果

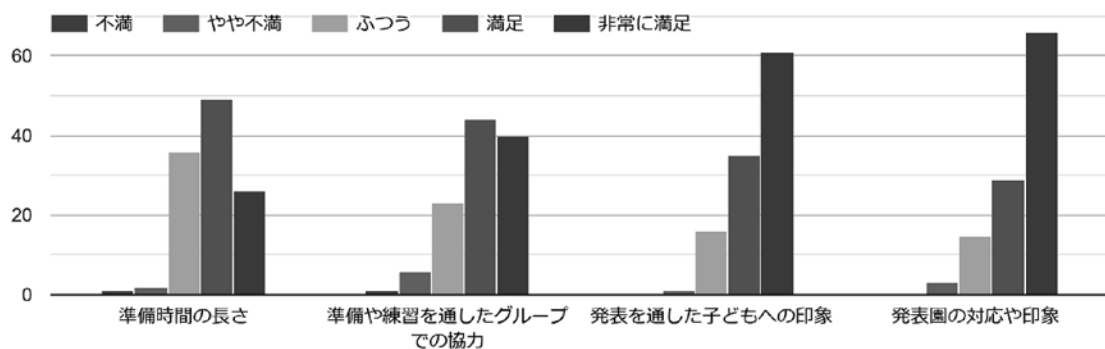


表4 地域の支援者としての関わりの工夫

N = 114

子どもにとっての地域の支援者という側面	強くそう思う	そう思う	どちらとも言えない	そう思わない	全くそう思わない
子どもと人間関係を持てるよう工夫をした	38.6%	57.9%	3.5%	0	0
子どもの年齢や興味を考え発表を工夫した	37.7%	55.3%	7.0%	0	0
子どもにわかりやすい言葉で説明できた	46.5%	49.1%	4.4%	0	0

子どもにとっての地域の支援者であるという側面

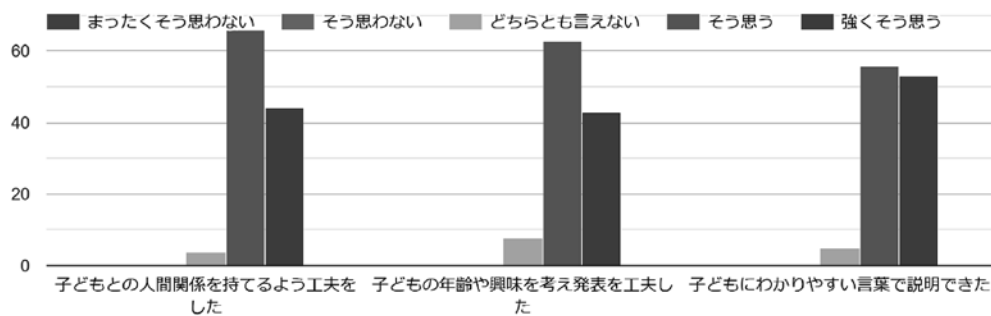


表5 保育学生として地域への取り組みに考えること

N = 114

保育を学ぶ学生としての側面	強くそう思う	そう思う	どちらとも言えない	そう思わない	全くそう思わない
地域には保育に生かせる資源がある	34.2%	57.0%	8.8%	0	0
子どもには地域とのつながりがあるとよい	51.8%	46.5%	1.8%	0	0
保育の場に地域の人材を活用すべきだ	43.4%	48.7%	8.0%	0	0
グループ活動からよい影響が得られた	46.5%	43.0%	9.6%	0.9%	0
このような機会がもっとあるとよい	40.4%	40.4%	18.4%	0.9%	0
グループメンバーの関与度	33.3%	48.2%	14.9%	3.5%	0
グループ編成の工夫	34.2%	38.6%	22.8%	2.6%	1.8%

保育を学ぶ学生としての側面

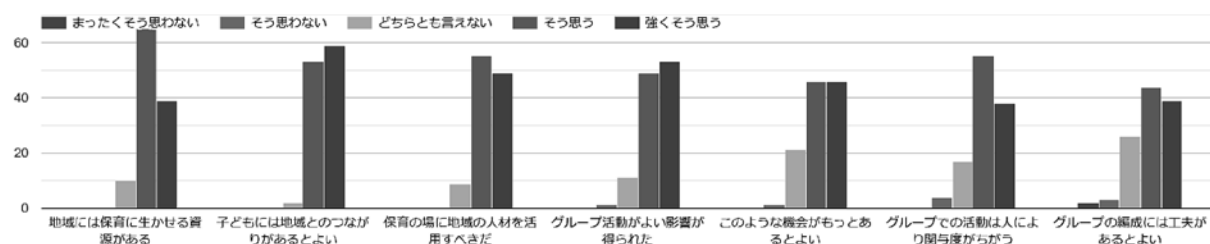


表6 本活動を通し特に学びとなったこと、考えたことについて(抜粋)

子どもたちが3匹の子ぶたに興味を持つことや、お面を被って劇あそびにつながることがわかった。
地域の子どもたちとの触れ合いや交流は、楽しい気持ちになり、このような機会があると近隣の一学生として、保育者を志す者として地域での評判や日頃からの行動にも気をつけるようになる。
子どもたちの前で実際に発表をすることで、反応を見て、そこから改善できるので、良い学びになりました。
私はこの活動から仲間と協力し一つのことを様々な視点から見てみんなで意見を出し合う大切さを強く感じました。そのおかげで発表では一人一人が忍者になりきり子どもたちが楽しめるようにするにはどうしたら良いのかを考え、自分自身が元気に取り組むことができました。
年齢にあった活動をすることで子ども達にも分かりやすく伝えることが出来た。またグループで活動することで皆で話し合う機会もあり協力することの大切さを学びました。とても楽しかったです。
子どもたちの素直さを感じる事ができた。子どもたちも参加できる劇にしたことで、子どもの前で演じるだけにはならず、子どもと共に楽しむ大切さを感じた。子どもの反応や、表情から子どもの素直さを感じ、とても嬉しかった。
今の時期にはどのような活動がいいのか、友達同士で考えることの楽しさを感じ、実際に子どもの前で行うと、年齢によって覚える速さが違ったり楽しそうにする様子もバラバラで、とても良い経験ができた。体を動かすことを楽しむ子どもが多く、みんな笑顔で楽しんでいて、活動を考えた学生側も楽しくできた。
ただ劇を発表するだけでなく参加型にすることで子ども達と楽しさを共有しながら行うことで、より楽しさが増した。「オオカミに負けない家はどんな家?」と尋ねた際に仮面ライダーなどが出てくるのではなく、コンクリートや、オオカミが今まで窓を覗いて子豚を見つけていたため、窓がない方がいいんじゃない? などとても物語に沿った案が出て、子どもたちはよく見て考えているんだなと思い、そういった子どもの考えを受け止めていく保育が大切だなと感じました。
今回の活動を通して、保育者が一方的に子どもに話したりするのではなく一緒に進めていく声かけなどの工夫が大切だということを学びました。保育者の声かけにより子ども同士の関わりが増え遊びの輪が広がっていくと感じました。
実習生として保育園に行くのではなく、あくまで地域の学生として行くことで地域の人との関わりが子どもにとって少しでも影響を受けることが分かりました。また実習とは違い長い間子どもと関わるわけではないので一瞬をどう楽しんでもらえるか、少しの時間で何を知ってほしいかなど考えることもできました。
どのような工夫をしたら子どもたちに喜んでもらえるのか、楽しんでもらえるのかを考えながらグループで話し合いを行いました。意見がすれ違った際に自分の意見を引っ込めてしまうのではなく、相手にしっかり伝えることが大切であるということを学びました。
子どもたちを巻き込んで行う保育は、子どもたちが楽しめるということだけでなく、自分たちの学びのためにもなると思いました。今回の活動を通して、関わりを持つこと、持った上での人間関係についてもっと学びを深めたいと感じることができました。
保育者ではなく地域の人間という立場から子どもと関わり、子どもたちが保育園の中の人ではなく、外部の人と関わることで子どもの社会性を身につけることができるというのが身をもって感じられた。
個人だけの頑張りではなく、グループを通しての協力をかねての取り組みだったため、自分の意見や他者の意見を取り入れ、一つの物事に自分の思いを入れ込むことや、仲間と協力することで、自分の発想とは違う考え方など、他者の意見を取り入れる大切さを学びました。

<p>グループで事前に何度も話し合い、今日を迎えました。準備するにあたって子どもがどんな反応してくれるのか予想し、またその関わりについていろいろ議論してきました。子どもたちの反応は本当に勉強になることが多く、今日の活動も私自身が楽しく終えることができ、子どもたちも本当に楽しそうに劇を見てくれていました。グループで活動内容を考える時は様々な意見が出ますが、そんな考え方もあるんだと保育者としての学びが増える点についてはとても良いことだと思っています。</p>
<p>今回の活動を通して、子どもたちや発表させていただいた園さんと劇を通して人間関係の大切さを改めて学ぶことができた。子どもたちの前では失敗してもとにかく笑顔で楽しくやれば子ども達も一緒に楽しんでもくれることを実感し、とてもいい経験になりました。</p>
<p>今回特に学ぶことができたのは、子どもたちは大人の真剣さを良く見てると感じたことです。大人が本気で子どもたちに劇を披露したから、子どもたちも真剣に聞いてくれていたのではないかと感じました。</p>
<p>子どもは、大学生などの学生と関わる機会が少ないと思うので、このような活動を通して人間関係の輪が広がると思った。この活動を通して、保育所が地域と連携して取り組んでいることはどのようなことがあるかをいろいろ学びたいという意欲が強くなった。</p>
<p>本活動を通して、地域の子どもたちとの関わりは大切であると感じた。実習とは違った関わり方をすることができ、自分たちが学んだ事で子どもたちと繋がれることは新たな学びを得ることができると思った。</p>
<p>子どもたちはわたしが想像していないところで大きく笑ったりなどしていてどこで笑ってくれるかわからないハラハラドキドキがありました。子どもには子どもなりの感性があるのだと改めて実感させられました。</p>
<p>私はまず、準備段階においてみんなで意見を出し合いながら活動した点がとても良かったなと思いました。かぶの土を作る際にも、「土って1色じゃないから色んな色を混ぜよう」と子どもながらの発想を取り入れ子どもが興味関心を抱けるような取り組みをしたことにとっても感動しました。また、発表の際には子どもたちが大きな声と一緒に「うんとこしょ！どっこいしょ！」と言ってくれて、これこそ人間関係の関わりなのではないかなと思いました。グループの皆とこの活動を通して仲が深まり子どもたちとの人間関係も作れたが私たち学生同士の人間関係も一緒に作っていったのではないかなと感じました。とても楽しい時間となりました。このような機会があればぜひ参加したいと思いました。</p>
<p>実際に演じていて、話の流れを知っている子どもは楽しそうに見ていましたが、それ以外の知らない子どもたちはあまり話を分かっていないように感じました。しかし、子ヤギを探す場面では、子どもたち全員が楽しそうにオオカミに教えてくれたり隠そうとしていたので、子どもたちも参加できるような作りなら、最後まで飽きずに物語を楽しむことが出来ると思いました。</p>
<p>グループで役割を相談しながら分担し発表するものに必要な道具などを準備したことで自分のできることはなにか考え行動することが大切だとわかりました。また、子どもたちは劇にあまり触れる機会がないとおっしゃっていたのでこのような機会があるとお互いにいい経験になるのではないかと考えました。</p>

表7 本活動での改善すべきところ

N = 114

○準備時間の不足について（14件） ・もう少し練習時間が欲しい 8 ・準備の時間配分 4 ・時間が合わずにあまり集まれなかった 2
○グループの編成について（21件） ・仕事の偏り 5 ・意欲の偏り 5 ・人数が多かった（4人くらいがよいのではないか） 4 ・グループ決めの工夫 2 ・仲の良い人同士だと他人任せになってしまう 2 ・もう少し貢献したかった ・役割分担を公平で明確にする ・発言がしやすい雰囲気があるとよかった
○発表の工夫と練習不足について（30件） ・子どもにわかりやすい言葉、構成で練習を完璧にしたかった 8 ・ハプニングや子どもの反応を想定して演技のパターンを作っておく 4 ・時間が余ってしまった（子どもが飽きてしまった） 4 ・年齢に応じた対応（年長児が率先して意見を言うため） 3 ・ダンスの振り付けを大きく踊る 2 ・子どもの気持ちを決めつけず、臨機応変に対応できるようにしておく 2 ・発表の前の盛り上げ方、発表後の終わり方 2 ・子どもから終わるのが早いと言われた。アレンジを加え、楽しみ方をイメージすればよかった 2 ・子どもの目線で気持ちをより考えておく ・もっと子どもを巻き込んでできる活動にすればよかった ・丁寧な説明が必要 ○事前の計画の明確化について（12件） ・保育施設内でのスケジュールや指導案を綿密に立てる 5 ・子どもと関わる時間が欲しかった。（遊び体験など） 5 ・人数を把握しておく 2
○その他（6件） ・マスクをしていて表情が伝わりにくかった 2 ・実施場所の確認、荷物の置き場の確認 ・園との事前の打ち合わせが必要だった ・学生間で見せ合う時間があるとよい ・回数を重ねると良いと思う
○特になし（31件）

5 考 察

（1）学生の多角的視点の成長

本活動を終え、当日の子どもたちの活発な反応と、学生アンケートから子どもたちとの関わりや、協力園から受け入れていただいたことは、学生にとって好印象の経験となった様子がうかがえる。実習生や保育者という視点ではなく、地域の大学生として子どもの立場で興味関心を探る

うとした視点、また、グループで話し合い、発表を組み立てたことは、一人では思いつかない、より広い視点での取り組みとなった。将来の保育者として、子どもの立場、園の立場、地域の人々の立場と様々な立場に理解が及ぶことは重要なことであろう。グループ活動は、学生にとって、楽しい経験にも辛い経験にもなったようである。社会や地域を考える場合、活動グループは縮図にも繋がることから、次回は、グループの人数の調整やミーティングやリアクションペーパーの記述内容からグループの成長に繋がる支援を丁寧に心がけて行きたい。

（２）取り組みを地域に広げるために

今回は、子どもの側に立っての調査ができていない。しかし、活動後に子どもたちがお面をつけ、劇あそびに発展していたことや、学生が躍ったダンスを日常に踊っているという協力園から嬉しいご報告を受け、子どもたちは関係性から得た経験を子どもなりに活かしてくれていることがわかった。未だレジョナラには程遠いが、このプロジェクトが地域に広がり、学生のみでなく地域の方々にも関心を抱いていただけるように様々な団体と繋がりを持つことや、新しい演者の開発や育成に取り組んでいきたい。子どもが笑顔でいる社会、「こどもまんなか社会」を具現化できる喜びを多くの人と共有するために。

6 おわりに

本プロジェクトを実施するに当たり、地域の幼稚園、保育施設13園のご協力をいただいた。子どもたちの素直な反応から参加した学生は、こどもまんなか社会を意識し充実感や保育を志す更なる意欲に繋がった。この場を借りて心より感謝の意を表する。

引用・参考文献

- ・石井希代子 2018「人を育て文化や町を創る市民参加型イベント「レミダデー」と「レジョナラ」」『発達156』ミネルヴァ書房
- ・大野雄子 2024「子どもが中心の地域による取り組み～レジョナラ2023に参加して～」『千葉敬愛短期大学総合子ども学研究所年報2023年度』 p117～p126
- ・森真理 2013 レジョ・エミリアからのおくりもの：子どもが真ん中にある乳幼児教育 フレーベル館